

日本の画期的トーンアームをフル活用

このトーンアームは、昨年中頃から今年にかけて各種オーディオ専門誌で好意を持って取り上げられた（詳細は文末の「ご参考」をお読みください）ViV LaboratoryのRigid Float（7インチ）です。

注）7インチというアーム長さは短い！今まで無かったものです。9インチ～が普通。

「アドオン」で設置可能ということでしたし、大変に好評だったので、導入を決意し発注したのが1月上旬でした。

しかし、生産能力を上回る注文が入ったのでしょう。手元に到着したのは3月上旬でした。さすがにしびれを切らしてViV Laboratoryに電話したところ、秋元さんが「貴方の注文は今回の出荷分に入っていると思います」と言われ、本当にその通りでした。

さて、このトーンアームが到着して、最初はただただこれを眺めていました。あまりに通常のトーンアームと違うので、感覚的に慣れることがまずは必要だろうと感じたからです。

様子に慣れた上で、各部の動き、全体の重さに慣れていくわけですが、重さも約2Kgという数字から想像する感じとは大分異なっていました。

アームベースの下部に重量が集中している、ピラミッド型の独特な重さでした。

ここで、ひとつの感覚的な判断が生じました：これは「アドオン」で補助的に使用するものではないなという、いわば予感のようなものです。別の表現をすれば「手強い！」。

次に、実際に設置する検討を開始。するとこのアームの特徴がもっと見えてきました。

それは次の2点です：

- 1 アームの水平位置が他のアームに比べかなり高い（図面上はセンターで56mm）。
- 2 アームベースがピラミッド型なために、7インチアームということと相まって、プレーヤーの外側からターンテーブルのセンターへ寄せることが難しい（9インチタイプならまず問題は無いでしょう）。
ターンテーブルの直径を300mmとしても、このアームのベース下端を25mmまでターンテーブルへ寄せなくてはなりません。

当初は現在使用中のプレーヤーの下側に台座受けを設置して何とかしようと考えたのですが、「寄せられない」のでは如何ともし難い。

不十分な条件下で無理をして使用するか、それとも考え方を根本的に変えて、このアームの機能を 100%、いやそれどころか 120%引き出せる完璧な条件を新しく作るか？です。

例えば、カートリッジの交換についてです。

このアームに付属するシェル（ネルソン・ホールド）ではカートリッジの取付位置は決まっています。

試みにオーディオテクニカの一般的な MC カートリッジ(AT33PTG/II)を付け、針先からアームとのジョイント面までの長さを計ると大体 60mm です。これはかなり長い。

現在使用中の DENON DP-A100 という、一般的なセットもの（＝オール・イン・ワン）のアームの場合、オーバー・ハング指定が 14mm なので、カートリッジとアームのジョイント面から針先までの距離は 54mm となっています。

注) 一般的なアームの場合、シェルとアームの接合面から針先までの距離は 52mm 前後、54mm はそもそもやや長めです。

（ネルソン・ホールドにカートリッジを取付けたものを DP-A100 へそのまま取付けるとオーバー・ハングは大体 20mm になり問題があります）

はたして、A100 用に 54mm で調整したカートリッジ+シェルをそのまま Rigid Float で使用出来るか？も考えてみました。

Rigid Float の場合、指定はオーバー・ハングではなく、何と！アンダー・ハングで「5～20mm 推奨」です。

注) 季刊 analog vol.34 の特別付録「保存版 アナログ機器データファイル 2012」のトーンアーム部門を見ても、普通の指定はオーバー・ハング 15mm 前後です。ストレート・アームだろうが J 型アームだろうが、です。

そういうことなので、ネルソン・ホールドに一般的なカートリッジを取付け、アンダー・ハング 5mm でアーム全体の位置を調整すれば、54mm で調整したカートリッジ+シェルではアンダー・ハングが $5+6=11\text{mm}$ となり、「推奨」範囲収まることとなります。

つまり、アーム長 $154\text{mm}+54\text{mm}+5\text{mm}=213\text{mm}$ となり、ここまで寄せられればまずは完璧だということです。

話しを元に戻します。「このアームの性能を 100%発揮するために必要な条件とは何か？」です。

これを整理してみます：

- 1 トーンアームの位置決めが相当に自由なこと、全体の回転方向も含め。

これはターンテーブルのスピンドルセンターとトーンアームセンターの距離が 215mm 以内であることも意味しています。さらには RCA 端子とケーブルの取り回しを余裕をもって出来ることが必要です。

- 2 このトーンアームは全高を下げられませんが、上げることは出来ます(20mm まで)。これを設置する面からレコード盤の上面 (=針先) までは、トーンアームの水平高(56mm)ートーンアーム中心から針先の下り(12mm 程度)ーターンテーブルシートの厚み(4mm 程度)=40mm 程度となりますので、40mm 以上の高さの違いがあれば、このトーンアームの高さ調整機能で追従が可能だというわけです。
- 3 トーンアームを設置する面自体で水平がとれるということ。このトーンアーム全体は細いスパイク 3 本で水平をとることが出来ますが、全体の高さがさらに上がってしまいます。設置面自体で水平をとれることが望ましい。

この条件を満足するためにはどうしたらよいか？です。

まず、既存のプレーヤーのキャビネット上面に設置することは「ダメそう」です。何しろ既存のプレーヤーのアームとバッティングをしてしまいます。

次に既存のプレーヤーの外側に設置する方法です。これも「ダメそう」です。一言でいって「(様々な意味で) 安定性に欠ける」と思われます。

こうなると、アームレスのプレーヤーを新規に手配し、そこへ専用でこのアームを設置するという考え方になります。

そこで探しました。アームレスで、回転が安定していて (必要な)、厚みがあり直径がレコード盤の 300mm に近いターンテーブルを持った、キャビネット一体型のお手頃価格のプレーヤー。

前述した「アナログ機器データファイル 2012」で探しましたが、これが見当たらないのです、「殆ど無い」状態でした。

例えば BRINKMANN の OASIS(アームレス)、これは見た目も良さそうだしと思ったのですが、¥1,711,500！です。これでは問題外。

ViV Laboratory の秋元さんは VPI をお使いだそうで、しかしこれはアームレスではありません (ターンテーブルの厚みは 45mm だから OK です)。

秋元さんからのもうひとつの情報は「Garrad 301 はたぶん大丈夫ですよ」でした。で、調べました。ガラード 301 本体は木製キャビネットの上からすぽっと落としこむので

すが、木製キャビネットからターンテーブル上面（シートを除く）まで実測 40mm という情報を（301 を扱って 38 年という）ジュピター・オーディオさんからいただきました。これならシート厚さ(2.5mm だそうです)を併せれば問題無さそうです。また 301 の場合は水平方向のアクセスも OK です。

しかしです。1950 年代の名機 301 を使い続ける自信はとて持てません。音質重視の英国式評価と、見た目重視の日本式評価の違いも判断が難しい問題です。

やはり新しい製品をと思い、行き着いた先がファイケルト・アナログの Woodpecker でした。

販売代理店さんに各種寸法の確認などし、これなら十分イケルという判断を致しました。

代理店さんに問合せをする前には次のような推定をしていました：

ターンテーブルの（キャビネットからの）推定高さ = $148\text{mm} - x$ (スピンドルの高さ) - キャビネット上面までの高さ $80\text{mm} = 53\text{mm}$ (スピンドル高さを 15mm として) ~ 48mm (スピンドル高さを 20mm として)

代理店さんからの実測連絡は 48.5mm でした。

手配が終ってみると、全体としてやや高価になり過ぎたかなあ・・・と反省しています。

しかし、冒頭に書きましたように、日本人が発案した独創的なアーム、これは本当に大事にしたいと思います。ご活躍を祈ります、ViV Laboratory！

ご参考： Rigid Float 関連のおもだった雑誌記事

季刊 Analog 2010 WINTER vol.30 「厳選！至福の銘品 音の五つ星物語」

「随所に光る天才的なひらめき・・・針先意外に固体の接地面が存在しない“奇跡の発想”を実現したトーンアーム」石原 俊氏

季刊 Analog 2011 SUMMER vol.32 「注目製品」

「アナログの歴史を大きく塗り替える画期的発想のトーンアーム」田中伊佐賀氏

この時点ではアームリフターもカートリッジシェル（ネルソン・ホールド）も本体には付属していませんでした。

本記事の写真にご注目いただきたいのですが、アームは 7 インチタイプで、使用されているターンテーブルはアコースティック・ソリッド Solid Wood MRX です。

このターンテーブルの直径はレコード盤とほぼ同じ、厚さは 50mm と極厚。
加えてターンテーブルのベース (=キャビネット) が特殊な形状、つまり正面から見ると左側奥が斜めにカットされていて、そのせいで7インチのアームをセンター・スピンドルへ寄せ易くなっています。

季刊 Analog 2011 WINTER vol.34 「注目製品 (試聴レポート)」

「アナログ盤に新たな完動をもたらすピボットが浮遊したトーンアーム」 貝山知弘氏
この時点では本体にアームリフター、レゾナンスリング、カートリッジシェル (ネルソンホールド) が付属しています。

ここで使用されたプレーヤーは2台 (テクニクス SL-1000Mk3D とミッチェル Orbe SE)。
7インチタイプに必要なターンテーブルの高さとアクセスの問題をどう解決したか?

SL-1000Mk3D では「高さが低すぎる」ので「結局アームベースを取り去った穴の部分に円筒形の金属を置き、その上に乗せて試聴した」とあり、

Orbe SE では (スケルトンタイプなのでアクセスの問題は無く) 「自作の台座の上に乗せて試聴した」とのこと。

また、たまたま本号の「読者のページ」には「ものすごいアーム」というタイトルで、福岡の森脇さんが寄稿されています。写真を見るとリンのターンテーブルのようですが、外側の木製の台座の上に7インチモデルを載せています。アクセスの問題は無かったようです。

季刊 analog 2012 SPRING vol.35

「特集 人気モデルの組合せを徹底検証 最新アナログシステムプラン①」

「ViV Laboratory/Rigid Float 空前絶後の大注目トーンアームはどんなプレーヤーでも実力を発揮するのか?」 井上千岳氏

使用されたプレーヤーはテクニクスの SL-1200Mk6 とラックスマンの PD-171 ですが、いずれも付属のトーンアームを外さず、プレーヤーの外側に台を置くセッティングです。共にアクセスはOKだったということでしょう。

なお、本記事には「Rigid Float のユーザーが使用するターンテーブル一覧 (一部のみ、2012年3月現在)」が載っており、そこには DENON DP-A100 も含まれています。

これはたぶん7インチモデルではなく9インチモデルのことだと思われます。

DP-A100 の場合、どうやっても (ターンテーブルの直径が 330mm あり、キャビネットが邪魔をしますので) 7インチモデルではアクセスが出来ません。

以上